学校評議員会視察	2023 年 5 月 19 日（金）

外国語をツールとして、世界と自分をつなぐ工夫を！

令和 5 年 5 月 19 日（金）、第 1 回学校評議員会を開催しました。委員は、文部科学省大臣官房総務調整官の柳澤好治様、前 APU 事務局部長・学長室長の村上健様、本校後援会副会長の宮永尚様、大分教育事務所長の安田憲司様です。4 名の方に、校内環境、全学級の授業の様子などを見ていただきました。

委員会では、学校経営、授業改善、校内研究、学校評価の 4 項目について意見交換しました。児童が ICT を使いながら「対話を深めている」。公立学校に広げたい。外国語をツールとしながら、世界と大分、世界と自分とをつなげて考えられるよう工夫するとよい。公立学校のモデルとして、働き方改革、ミドルリーダーの育成などの情報をわかりやすく発信するとよい。などの御意見をいただきました。

令和５年度第１回学校評議員会　議事録概要（大分大学教育学部附属小学校）

１．日時
令和５年５月19日（金）
１０：００～１２：００

２．場所
附属小学校会議室

３．参加者
（学校評議員）
宮永　尚 氏　　村上　健 氏　　安田　憲司 氏
柳澤　好治 氏　　以上４名
（附属小学校）
木村　典之／校長　　築城　幸司／教頭
稙田　聖紀／主幹教諭　　桐野　愛　／指導教諭
甲斐　義一／研究主任

４．当日の内容
（学校経営方針について）
校長：「グローカルリーダー」は、これからの未来をどのように生きていくのかというビジョンから生まれた言葉である。「グローカル」は、世界を見渡す広い視野と地域・足元をしっかりと見据えて足場を固めるという意味合い、「リーダー」は、社会や所属する集団に奉仕する、貢献できる資質能力を持った人物として教育活動を行っている。資質能力については、９つのマトリクスの中央に「公共」を入れた。附属の公共性が求められており、社会に貢献できる人材育成が務めである。子どもに求めていくのであれば、教職員もグローカルリーダーであるということを共有し、地域の戻った時に貢献できる、中核となれる力をつけていこうと言っている。
主幹：FUSYO VISION については、資質・能力を９つのマトリクスに位置づけたもの、学校評価について、働き方改革の項目などを載せている。配付や HP への掲載などを通し、地域や公立の学校のモデル校として発信している。
主幹：各学年のテーマについては、学校教育目標とつなげて各学年が子どもとともに作成した。6 年間のつながりを意識している。
柳澤：今後の留意点として。教員採用状況をみると教育の質の低下が懸念される。教育実習生への指導の充実が求められる。実習生を受け入れる学校として変えていくべき部分があるかを含めて、社会情勢の変化を見据えて、大学と連携して行ってもらいたい。働き方改革や先生の資質・能力の向上が教育関係・政治の中で今年、来年と大きなテーマとなる。働き方改革やミドルリーダーの育成を行ってきた実績を公立学校、大分県の教育現場へわかりやすく示し、どう実行可能なものにしていくか、意識しながら取組を進め、存在意義を発揮してもらいたい。
村上：「グローバル」という言葉のイメージが「英語を勉強する」というようにとらえられていることが多い。ツールとしては大事だが、世界で起きていることを自分のこととしてつなげるような学習や意見をもつことが大切。「グローカル」とは世界のことを自分とを結びつけることである。具体的にはどうしていくか、英語学習だけに終わらないようにし、外とのつながりがもっとみえるとよい。
柳澤：「グローバル」については、まだ広げられる余地がある。海外の学校とオンラインでつながることもできる。現地に派遣された日本人学校の先生、大分の企業、大学のつて、姉妹都市、ALT、APU の学生など、外とのつながりを活用した取組が考えられる。

（授業改善について）
指導：今年度から「学びあいの授業」をスタートする。研修の時間も多く確保できない中で OJT を活性化させる。日々の積み重ねを校内研修につなげ、今後の校内研修のあり方について発信し、地域貢献につなげたい。授業公開についても６日間にし、多くの先生が授業を見ることができるよう機会を増やしている。実習期間にも行うことで実習生にも公開できる。
指導：昨年度助言をいただいたことを踏まえ、他機関との連携を進めている。教育センターとは、アンケートの結果などを双方向で活用・紹介、教育委員会とは、公開授業での指導主事による指導講評の機会を増やしていくこと、大学とは、授業公開に向けての助言をもらうことや実習時や大学での講義で現場の様子を学生へ伝える機会を増やすことで連携をさらに深めていくように計画している。実習の WG を発足し、新しい実習のあり方を考えている。「即戦力」という言葉を意識するとともに、授業の基盤となる学級経営についてもしっかりと伝えていく。
指導：公開した授業などを YouTube で配信している。また、行ったことを報告するだけではなく、附属の取組が多くの先生に役立つよう、ICT 活用実践事例集では「修正指導案形式」にし、加えて具体的な活用場面を入れた。学びあいボードの HP への掲載も同様の思いである。

（校内研究について）
研究：本校の校内研究は、「学級経営」「県の改善の重点を受けた授業研究」「外国語活動・外国語科」の３つの柱で行っている。①についてはフリートーク、ほめ言葉のシャワー、価値語の掲示、成長ノートの取組を継続的に取り組む。②については、県が令和５年度の改善の重点としている２つのことを意図して授業公開を行う。③については、単元のゴールと具体的な英語表現をつなげていく。
研究：本年の研究テーマ子どもの実態や情報化が進む社会の情勢を考え、FUSYO-VISION の９つのマトリクスにもある「情報活用能力の育成」とした。問題を発見したり、解決したりするプロセスの中で育成されると仮説をたて、研究を進めている。
村上：外国語の学習に関連して、日本語のコミュニケーションでも同様であるが、話すことや発信することは、今後 AI へと代わってくる。もちろん学習することは必要である。しかし、国のことやバックグラウンドを知り多様性を理解して「聞く」ことは、AI では、とってかわることはできない。「‘寛容性をもって’聞く力」をどのように育てていくかが重要。
主幹：「グローバル」の話の中でもあった、世界で起こっていることと組み合わせていくことで理解が深まる。内面からの「聞く力」の育成にもつながげたい。また、様々な人とつなげたい。
柳澤：外国語セミナーなど講師を継続的に招くのに、前回からの変化を明らかにして助言をもらうようにしていくとよい。授業動画を外部に発信する際に、撮影方法の工夫（話し合い時に子どもが撮影など）をすることで臨場感のあるものにしてほしい。本校の取組は、大分にとどま

らず全国の教職員研修に役立てることもできると思っている。常に新鮮さを持って、気づきを大切にしてほしい。研修の中に決まった内容だけでなく、時事的なものも取り入れ、共有することが必要。せっかくいい取組を積み重ねても、1 つの失敗が信用を落とし、すべてを台無しにしてしまいかねないことには十分に注意してほしい。

宮永：今は、チームとしてモチベーションを上げていくというリーダー像が強い。取組が生かされてうまく回っていると思っている。授業で使用する道具を忘れた子どもに対してのケアはどのようになっているのか。全員がリーダーシップを持てるとは限らない。いじめなどの現状についてはどのような状況にあるのか。

主幹：道具を忘れた子どもへのフォローは考えている。忘れていても、できる活動は行わせている。iPad については、修理期間中に予備があるときには貸し出しをしている。

宮永：ICT を活用することが多い中での保険について、他の会議でも話題になった。修理中の予備はないのか。

主幹：年度のはじめは、予備がなかったが、現在は予備機があるので、貸し出しができる。情報を共有していく。

指導：昨年度は年間 3 回いじめ調査を行った。学校だけでなく学校外での活動におけるもので本校独自で解消が難しいものや解消に向けて継続して取り組む必要があるものもある。

宮永：今現在、いじめに対しての特別な取り組みなどはおこなっているか。

研究：コロナウィルス等や身体的な個性について学年で偏見をなくすような指導をしている。

指導：いじめが起こったことの把握、解決をはかり、継続していないかを注意深く見ていくことを行っている。

主幹：組織的に、的確に把握し、素早く取り組むようにしている。起きた時にする指導だけではなく、学級経営の中でもみんなの気持ちを大事にするなど普段からいじめをなくすように取り組んでいる。

指導：担任が抱え込まないように、みんなで対応ができることが大事だと伝えている。

安田：発表している子どもが論理的であった。聞いている子どもの反応などからも対話力が高まっていると感じた。言葉でつながるための手段として、ICT の活用がうまくいっている。公立の多くの先生に授業の良いイメージを持ってもらえると考える。公開のみでなく、YouTube での配信等で実践を広げてほしいと思う。学びあいボードは、特に先生同士お互いのやっていることが見えにくい小規模校で効果があるかもしれない。成果を皆でシェアできるところがよい。様々な実践を教育事務所としても伝えていきたい。

柳澤：教育センターや大学との連携が進んでいることがわかった。しかし、「連携」という言葉はどこもが使う。本校はその先までせっかく取組を進め、実績を上げているのだから、例えば「連携による弱点克服」というように、自信をもってより詳しく取組を載せて発信しても良い。先生たちは、学校のことだけわかっていればよいのではなく、いずれ広い世界へ巣立つ子どもたちに指導をする先生こそが視野を広げてほしい。様々な場面で、様々な人と交流し、刺激を受けてほしい。有志でよいので、企業、APU、民間団体などの話を聞く機会があるとよい。それが地域連携・外部連携の契機となる。あるいは、少しの時間でも先生が、この評議員会を傍聴するのも良いのではないか。

（学校評価について）

主幹：働き方改革について公立学校へも広めていけるよう、校長が教育事務所、委員会へ働き方改革の資料を渡し、取組の話をしている。4 年度の削減項目に対して、どのくらい時間を削減できたかを計算して資料にした。公立学校でもできることも多い。今年度も業務の改善に向けて取り組んでいる。気が付いたことが働き方改革につながると考えている。（働き方改革への評議員の意見について学校評価の中に位置づけている。）

教頭：津久見市の教育長、九重町教育委員会が管内の学校へ本校の取組資料を配付し、参考にして業務削減を進めると聞いている。

柳澤：ぜひそのような教委と相互の情報共有を続けてほしい。公立学校で進めば、附属からの成果還元のじっせきになる。

村上：思い切って変えないと進まない。数値目標や廃止というように明確に表すことが大切である。

柳澤：持ち帰りの仕事について、自主的教材研究などをするなというのもおかしなことであるが、勤務時間だけが短くなって、実際には裏で業務やっているならば意味がないという批判に対してどうであるか。業務削減をしない中で超勤を削減しなさいと言ってもできない。今後も公立の学校と支援・協力関係を築きながら、本校の効果を見極めて、広めてほしい。

安田：先生方の当事者意識を持ってほしい。良さを実感しているのかなどの意識調査もあわせて行ってほしい。

柳澤：市町村も含めて検証できれば、文科省から出す働き方改革の事例集に載せることもありというくらいのイメージで期待している。

主幹：子どもたちのためと考えるとどこまでも際限なくがんばるということがある。しかし、これからの未来を担う子どもたちの前に立っている先生がワークライフバランスの取れていない姿でよいのか。時間の中でできることをやっていく。自己研鑽の時間を取ることは教師として学び続ける姿勢として大切であるが、自分の時間を作ることも必要だと考える。

柳澤：時間ができたというゆとりということだけでなく、その時間で別のことができたとか、先ほどの話のことのように他の職業の方とかかわることができたなどがあると、そのことも子どもたちの教育への還元にもなる。

安田：同業者以外との交流がどのように教育に生かされていくのかも知りたい。

柳澤：刷新プランはいずれ改定の予定があるか

校長：今大学としても今後どう刷新していくかを考えている。

柳澤：基本は現在のプランをベースにしつつも、変えていってよいのではないか。「刷新」プランが 7，8 年前のものでは寂しい。もう少し詳しく取組や他との連携の内容を組み入れていくとよい。

主幹よりお礼と次回（9 月 16 日金曜日）開催について伝え終了　以上

（文責）主幹教諭　植田　聖紀